

おじいさーん！

「どうしたあ！」

私の感情を返して！

「ダメだ。君におじいさんと呼ばれてしまったからなんだよ？」

私のお父さんを返して！

「何を言っているの？ 君はお父さんと呼んだでしょ！」

ダメよ！ もうとつくにおじいさんのライフはゼロよ！

「モンスターカード！」

というわけで始まりまーす。

「おーい！」

さて。

「なんでしよう」

今日地味ですね！

「なんで！」

というネタはどうでしょう？

「地味だね」

……うん。

「なんでそんなにへこんでいるの？」

いやね、なんかおじいさんの塊がどこかできていないかなあって思っていた記憶が在ったのかな？

「知りません。そんなことは病院で薬を貰っておじいさんとごつつんこしてください」  
意味わかりません。

「わかつてくれえい！」

むりほー。

「新しいその言葉に可能性を感じるわ」

むりんほー。

「かりんとう」

おかし。

「いと」

何を言っているの？

「おじいさんが愛しく想っているおじいさん」

何を言いたいの？

「おじいさんがわらってくださいといっているからですよ！」

まさか、おじいさんはそんなにもおじいさんだったのか！

「そうなんですよ。おじいさんは塊を知っているですよ」

どっかに行ってしまえ。

「ですよ。ところで」

どうした。

「私はいつも想っていることがあります」

どんなことだい？

「それは！ お星さまになりたいと思っっている人がいることです。おじいさんはいつも笑ってくれました」

何の話？

「おじいさんは輝きを忘れていつも笑っていました。けどそのくしゃつとした表情を何故、おじいさんは失くしてしまったのでしょうか」

さて、ピザでも食べようか。

「そんな言葉も覚えていないらしくて。だから涙を流すのもいつもそうだったようにして。おじいさんは涙を流すことを自分に言い聞かせて。笑ってくださいと思っっているのが今でも思い出せる——」

美味しいねえ。ほんとにお米が食べられるようになってからはなんて幸せなんだろう。

「美味しいなんて言わないで。私はいつもおじいさんと一緒にご飯を食べていたの。だからその思い出の中に一人佇んでいる私があった。そして、いつものように笑顔をおじいさんに向けるの。おじいさん、って」

戦時中は日本刀にでも祈りを捧げてくださいませ。

「おじいさんはいつも笑っていました。ようやく帰って来たんだね、とお嫁さんは笑いました。美味しいご飯がとつても美味しいと言ってくれたことがお嫁さんが喜んでることなんだと、今でも思い出します」

わしはあ、いつものように大切にしているだけだよ。お主がくれたこのペンダントをな。

「時代を先に行ったおじいさんがいつも大切にしていた、そのペンダントを大切にしているお嫁さんを笑ったのが今でも思い出せるそうです。それがいつも大切だったから」

わしはあ、もう長くはない。恐らくこれから旅に出る天皇様が今でもお星さまに祈り事を捧げていることに呆れを通り越してしまつたのは今でも思い出せるのです。

「それがいつものようなことを知っていたから。何も知らないのはいつものこと。どうしても失ってしまったことが笑ってほしいのだから。それがいつものように頑張っている」

わしはあ、いつも知っていたことを話すだけなんでえ。面白くもなく、可笑しくもなく。わしは、老いた。もうこれからのことを望むことすらもう無理なのかもしれないのお。

「私は知っている、おじいさんがいつものように笑ってくれたらもう何もいらぬ。そしてこ

れからもずっと、ずっと」

それは、わしのことを忘れていった人のことじゃなあ。

「私は今でも空を見つめて一人思うのです。あの輝きに素晴らしさを持っているのはもう誰もいないのだと」

ここにいるのが、当たり前だったんだ——。

「そして一人で笑顔になって。教室から飛び出した、それは。何もなく、世界のことを知りたがっていた、そんな夜空でした」

明るくなっているのも、友達と一緒に遊んだこの部屋でも。

「夜空を見つめ、こう思う」

いつも共に居よう。

「それがささやかな幸せなんだから——」

さあて。私のことを覚えている人はどこにいますか？

「知らんがな。というよりなんだあれは！ おじいさんがおじちゃんになってもうたやないか？ ひらがなが多いからずるい。だからカタカナにする！」

「ずるい——。ずるい」

ずるくなんてないよ？ おじいさんはいつも笑っているよ。

「ずるいなあ。ホントにずるい！ おばあさんはいつもわたしのことをおしえてくれない」  
ねえ。時々思うことがあるんだ！

「ええ〜、違うの？」

「違うんですよ。あかんたれを宣っているのは貴様だけだ！ ババアン！（爆）  
「なにしてんのお。おじさんはいつもおじいさんなんだよね？」

「違うんです。僕のことはいつも一緒に居た、あの日のおかげで。」

「テイクツ〜」

「違うんです！ 僕のことはいつも一緒に居た、意味不明なEカードコンボ。」

「てくすりー」

「いがないですよ？」

「僕のことを一生懸命頑張ってください」

イミフ。

「おじさんにはないしょだよ？」

大人には内緒だよシリーズよろしく。

「誰？」

私でえす！

「おお、大いなる力よ。我に旧大久の力を」

なにそれ。

「え？ 知らないの？ おじさんには泣き顔に置いてきてつていう作品」  
長いしキモいし頭脳明晰だし。

「ああ、それは、あれだね。歓び事を教えて、でしょ？」

あ、わかるんだ！ やったあ。それはそれは、どうでもいいは？

「あの名作。皆を護るよくさんがね。いつも言っていたんだよ。もう私は永くないんだと」  
いや、そんな永さじゃ、長いのか短いのか全く不明なんですが。

「わしはあ、いつもおじさんだったんだよね。緊張感が増しておじいさんと一緒という番組を  
観たくてね」

どこにいてもあたいはおじさんと一緒に居たかった。

「なあに。わしのことを知っているのはもう誰もおらぬ。それが最期だったんだから」  
最後つて、なんですか。

「なあに、あたいのことを知っている、ということだよ？」

うわあ位！ 解った！ おじさんはまさか！

「そう、わたしのことなんです。わたしはおじさんというひらがなでかかれたときにはつど  
うするおじさんというひらがなでえす」

うつつつ。私は貴方を知ってしまった。時々思い出すのです。

「あの夏の日のことを今でも思い出すのです」

涙を流し、ひらがなでお互いを問いかけてきて。

「一緒に汗を流したじゃないかと、一生懸命に笑ってくださいと、何もできなかったあの夏の日」

二人で一緒に涙を流すのはふあんたじーのことではありきたり。

「だから、共に過ごそうと知ってしまった、彼女のことをなぜ、今になって」

私は涙を拭こうとしました。私はよく笑ってほしいと彼女に言いました。

「それでも彼女は何も言わずに私をじっと見据える」

それは無機質な表情だった。

「なにもしないで」

なにかをいって。

「教えてよ」

無駄だよ。

「一生懸命頑張ったんだから」

ダメだよ。

「それでも」

それでも。

「私は貴方を愛しています」

彼女の気持ちを知っているから。

「お互いにちゃんとした距離を置いて」

これからを過ごそうと思っています。

「世界に名を馳せてしまったのは何も変わりようのない、そんな美しき世界だったんだから」  
今でも。そう信じている。

「そしてこれからを作っていく二人に」

乾杯の音頭を踊りたいと思います。

「みんなー！ ついてきているかあ？ 今回のフルボッコされるおまいらに今日は特別サー

ビスだあ！」

それでは聞いてもらいましょう。

「霜月の季節に新しい彼女を乗せて」

何を言っている。

「どうした。何があつたあ！」

いやいや、知らないなんて言葉はもう必要なぞしないのですぞ！

「何を言っている」

え？ おじさんはどこにもひらがなで嘲け笑える最初の人でしょ？

「何を知っている。おじさんなんてどこにもいないのよ？」

ええ？ ええ。ええ？

「何を言っている。教会にい教会？」

にい。

「にい」

おじさん。いつもそこにいたおっさんを知らないか？

「あんたが、あの！ いやあ、照れるねえ」

家でテレビでも見ても！

「失礼な！ おじさんはいつもビデオデッキを見ているぞ！」

そうなの？

「うん……。どうして、そんなに嘆キツスをするの？」

幼女。

「うん」

児女。

「うん。何が言いたいんだい！」

へんたーい！

「うわああああ！ すみませんでしたあ！ もうDVDplayer is this game」

何が言いたいのか？ 値鵜のことをおじいさんと呼んでいるんだよね？

「うわっはん。もしかしてくしやみのことをおじさんとよんではないのかい？」

何を思っでそんなことを考えているのか？

「おじさん、おばさん、ルンルン。おばさん、おじさん、あの日のメモリー」

いみわからん。

「でもさあ、時々おいら思い出すんだよね」

どしたん。なにさあつてけろさ。

「何子？」

音子。

「まあ、いいでしょう。これから、あらかじめ用意された、世界の運命を知っている人に全てを教えてあげ魔粗油」

変換ミスと誤字脱字に気を付けましょう。

「どうもろこし。突然のように思い出しました。いつものように笑ってくれた人は底に這いませんでした」

何言っているのか。私は嵐の中に彼女がいることにどこか遠い地平線に輝いていることを知ったから。

「思い出の中にいるのが貴方の世界のことを知っているのだから。いつものようにどこか遠い場所です笑ってください」

いつもそこで一緒に居たいんだから。いつもそこで笑っていたいんだから。

「どうしてこんなにも辛いのか？」

私はどうもこしを食べたくて仕方ないの。

「おじいさん、教えて？ 私はどうして？」

どうして、おじいさんと一緒に暮らすようになったの？

「今ではもうわからない。それだけが事実だとしても。笑い事じゃないことが私の声を呼んでいる」

もうどこにもいないのは何も変わらないことだとしても。

「いつの間にか頑張っている人を応援しているんだと」

そう常に思っている。

「だから。いつものように笑顔でいてください。そしてこれから」

私は旅立ちます。

「私は貴方を愛していることを伝えに」

私は旅立つのです——。

一生劍舞頑張る蘇!

「ひらがなが一つしかない!」

いやいや、そんなことはございませんよ。

「おじいさ、ん!」

とりあえず、読み方を教えてくれ。

「え? ブルマをくれ?」

何を言っている。スカートを望むのですよ。

「スカートの下にブルマがある?」

ちよつとピンク色になりつつある。

「さて、と。私はいろんな意味で仕事をしないとイケないのだから」

あの日のことね? 奈緒美さん。

「誰?」

ええ。もうおそらく誰にも気付かれないでしょう。きつとあのときから。

「知りません。だけど、君に一生けん面頑張ってほしいのだと」

あの時が過ぎ去った。そしてこれからも脱力してしまつたおじいさんに教えないとイケない。

「装備品! 過ぎたるは及ばざるが如し。リバーズカードですよん」

いつの日か、そんなことを夢に見ていた時間があつたなんて。私には信じられなかつた。

「いったい私は何を言っているのって」  
知りません。

「こらあ！ おじいさんにカートをやらないといけないでしょ！」

ソマリアにでも行つてこい！

「だけど、おじいさんはよく嗤っていることに安どの声が聞こえていることにも私はよく助けを貰っているから。」

いつでもいいよ。私は待っている。

「そして気が付けば次の季節になつている事実が気が付いた」

師走の時期から、恐ろしく答えを求めているのが私の感情なんだと今でも知っていたから。  
「いつの日にもなんびとたりともわたしを求めている。人は恐ろしくいまいまでの感情と共にいつまでも傍に居てくれる人を探しているのだから。それが当たり前なんだと知っていて、知らないのに当たり前だと思つて」

それが美しいことだと信じていたことを今でも信じている。

「オリジナリテイのことを信じて。私は待っているから」

ちゃんと挨拶をしてくれるのなら、私は今でも思い出す。

「そう、あれは夏の日に陰りを見せた、虹を見せてくれた異世界の少年との邂逅——」  
いつも足跡を残していたのは嘘じゃなかった。そしてこれからも、いつまでも。

「その思い出を思い出す日が在るのだと信じて」

私は少年と一緒に遊ぼうと。

「そう、思ったのだ」

おおい。

「何？ トイレットペーパーなら、ここにはないよ？」

え？ なんで？ お父さんのことを信じていないの？

「おじいさんはどこにもいないの。だけど信じてくれたのなら今でも伸長してします」

意味わかりません。というより聞いてよ。ブラックペーパーをいつも笑っているのがあるんだよ？

「天照大神様！ ブラックペーパーを見つけました！」  
なんだと！

「いや、あんたはそんなキャラじゃないでしょ」

いや、そこは軟化ノリ的な？

「というか、アマテラスって呼び醜いね。全くだ」

とりあえず、誤字脱字と色々と間違えている部分は訂正する気はないのね。

「まあ、おじいちゃんは。天照様をグアムで見たらしい」

天照の時期はもう終わった。

「私の愛を信じて！」

この世の終わりに全てを見たの！　といより資料より引用して大丈夫？

「知らん！」

というか、引用なんてしてないよね！　眠名消防かwらみたいなの何時。

「というか、真面目に喋ってくれ。私は何を言えがいいのかわからん。おじいさんつたらぐらい」

何をしても無駄なようだね。

「来なよ。返り討ちにしてくれるわ！」

まあ、無駄な物だったんだねえ。

「私の感情はいつもそうやって笑ってくればそれでいいから」

どっちにしろ私は貴方のことを知らないのよ。

「そう言い聞かせてくれてもいいのに」

おじいさんは笑っているのだろうか。

「おじいさんは泣いているのだろうか」

わからない。

「わからない」

だけど、一度決めたことは返ることはないと思っているのだから。

「そしてこの時をしんじてよというしうねんが笑っている」  
もうわたしはなにもできない。

「ほだされていなくてきのうのように。そして似ている感情。それは骨を砕くかのような痛みを持つているのではないのかと」

知っているから。

「ありがとう」

さようなら。

「私に行きます。これからあなたを忘れる旅に」

僕は自分を知りたかったときの少年に。

「だから」

いつまでも一緒に居た思い出を。

「二人で作ったのは間違いのない素敵な思い出を」

私は以て。

「僕は捨てて」

未来へと歩んでいくのです——。

さてと。おじいさんについてはもういいよね？

「ええ。僕はおじいさんという名を失ってしまいますがね」

おとうさん。おじいさんがわろかしてきまあす！

「どこの方言？」

おとうさんです！

「おとうさんは単語でしょ？」

いやいや、そんなこと言ったらこの世全てのものが単語になるよ？

「あ」

それも。

「？」

それも。

「( ^ 3 ^ )」

ごめんなさい。

「私のことを信じるようになりましたね」

というか、それはずるくない？

「( ^ 3 ^ )」

ごめんなさい。

「とりあえず私目はおじいさんということを知りたかつたんだよお」

いつもそんなことで喧嘩したら行けないって言われていたから。

「おじいさんはどこで何していたのかな？」

わかんない。乙女は笑っているって言いながら叫んでいる人じやないのかなって。

「わかんない。だけど、おじいさんはそんな顔をしているでしょ？」

どうなんだろうねえ。おじいさんは何も知らないから。どうせ、わたしのことを知っているからすぐに追いついてくるよ。

「そうなんだ。あの公園で一緒に遊んでいた時の思い出を思い返してくれないかな？」

そうなんだよね。そうして忘れ去られたときのことが辛くて仕方ないのかな？

「わからない。ただ、今でもそうだったら困るけど。でも信じてくれてもいいんだよ」

そうなんだ。いつもそうして会話をしていたからかなあ？

「わかんないけどね。でも、私は信じてほしいの。あのときから何をしているのかなっておじいさんと一緒に居てくれたら嬉しいのかな」

おじいさんって単語お互い何回使ったんだろうね。

「わからないの……。もう、これからのことも、これ以上のことも。そしてそれ以下はないのだから」

いつもそうして……。泣いていたよね。

「うん、思い出すだけでも辛い。だから」

一緒に涙を流してくれたじゃん。わしはあ、いつもそこで笑っていたよ。

「そんな声が聞こえた気がして私ははにかんだ表情を空へと向けた」

おじいさん。想いは伝わりました。私の声が聞こえたら、いつも空に笑いかけたのよ、と思  
い出したから。

「それが一緒に伝わっているのだから。教えてほしい言葉を誰かに私にくれているから」  
おじいさん。一緒に笑おうよ。

「いつもそうだったよね。ねえ、お姉さん」  
どうしたの？

「今日は病院に行かないの？」

そうね、お姉さんはね、おじいさん。つまり君のひいおじいちゃんにあたる人のね、記念日  
なの。

「僕、そんなこと知らないの。お父さんのことをいつも見ていたから」

お父さんもね、辛いんだと思う。あの人を知っているから、今でも苦しんでいるんだよ。

「おじいちゃんか。きつとね、お姉さんに何かを教えてくれているんだろうと思うんだ。そう  
だ！ 僕が占星術してあげる！」

そこだけは君は男の子だねえ。どうして？ そんなことをしても何もできないよ？

「きつとね、お姉さんが知らないこともあるんだってこと」  
「そっか。」

「私たち姉弟はもう、解放されたの。お父さん。だから見てて。私たちはついに行くから」  
「どうしたの？ お姉さん？」

「んーん。何も無いよ。さ、行きましょ。今日は私が豪勢に料理をするから」  
「うわあい！ でも、僕、占星術したいのに。」

「いいの。やらなくても結果はわかっているから」  
「そうなの？」

「そうなのよ」

黄昏時に映える二人の景色は何も失わずにいられたあの頃を思い出すらしい。それでも幸せだと訴えながら。そして、その幸せの形は何も見出すことなく、空をいつまでも見つめていた、そんな気がした。

運命の時がやって来た（笑）。

「なぜ?!」

「だってさあ、あたいのターンだよ？ そりゃ運命の時でしょうに。」

「ええ。僕はトイレトツペーパー。トイレットではないことに着目を」

知りません。お知り合いの方ですか？

「誰なんでしょうね、まったく。私は僕という表現は決していたしません。全く。おじいさんはどうしてそんなことをしているんでしょうねえ」

知りません。おじいさんは一緒に笑ってはくれませんでした。

「誰なんだと。わたらつてよ」

何を言っている。おじいさんはどこに行つたのよ！　と言つたら、どうする？

「知りません。立場逆転の罪を貴方に着せましょう。そしたらほらビックリ！　興味ナツシング！」

あー！　聞いている曲のフレーズを書いたあ！　ずるいー。

「知りません。真実の罪を着せましょう。そしたらほらびっくり！　わざと書かなかつた場所があるでしょう？」

あー？　おじいさんとしての要望を知りたかつたので。というか私のことを無視したら行けないでしょう？

「どこに行くの？」

まどマギの世界。あの世界は本当だつたのだ。

「だじえ。いっつもだじえ。だじえ。だつたのだ！」

ま、まさか、そんな秘密があつたんですか！

「そうだ。俺が来たからもう大丈夫！ 安心した前」

そうか。そうだったのだ。

「これは仕組まれた罠だったのだ」

いつもそれに気付いていたので。わたしは私だけの世界を導いてあげましょう。

「どうして、どうして突然そんなことを言い出すのだ！」

だって、だじえの存在を知っているのは、まだマギの人ですよ？

「どうせ、そんなことを言つて宗教の世界に入るんでしょ？」

それは違うな。というかどこに宗教色が在った？

「いやないけどね。信者という点ではもしかしたら辺りなのではないのかと思つてもいいのでは？」

「ただ、そんなことを作る気がなかったけど、その代わり大切なものをずっと見つめていたのです。」

「おじいさん。知つている？ だじえのことを知つているのは私の世代だけなんです。それがおじいさんに伝わること。それが私の驚愕の事実なんです」

いつも私はだじえを知っていた。だじえを求めていた。だじえ協会を作るぐらいに、教会を造つたのです。いずれこの世界がだじえに染まる頃。私は涙を流して諸手を挙げるでしょう。嬉しくて仕方ないと言いながら。

「いつも私は見ていた。見ていた事実を伝えたいのだから。私のことを信じているのは椅子を運んでいるガンジーさんだけなんだから」

そしてその空を見つめていたら、ふと思うことがあった。

「鳥が綺麗だと」

教会のスタンドグラスの中に映った黄昏時に私の涙腺が刺激されているのだから。

「いつものように姿を映してくれた、あの瞳はもう思い出すのこのできない思い出」

それでも、鳥が綺麗なのは何も変わらない。

「所、其故、為。笑。私」

その言葉を知っている人はもうどこにもいないけれど。

「本当に鳥が綺麗なのだと感じる人はいる。さすれば伝わるものがあるということなのだから」

それが最期の、最後の。そして最初の、原初の事実。

「今でもそう思いながら」

空がきれいだと思いつつながら。

「教会で祈りを捧げているのです」